彙　報

○平成二十三年度講義題目

〈大学院〉

日本文学研究の方法(1)(2)　高橋教授・塩村教授
日本の文芸論(1)(2)　阿部教授・坪井教授
平安朝文学研究と文学理論(1)(2)　大井田准教授
西鶴研究(1)(2)　高橋教授
明治の小説と出版文化　高橋教授
和歌・歴史・源氏物語　塩村教授
三十六歌仙を読む(1)(2)　甘露純規講師(非)
徒然草研究(1)(2)　久冨木原玲講師(非)
中世人の連想の世界(1)(2)　高橋教授
日本書誌学研究(1)(2)　塩村教授
日本語学説史の研究　塩村教授
万葉集を読む　釘貫教授
本居宣長『玉あられ』研究　釘貫教授
『天草版平家物語』研究A・B　宮地准教授
日本語研究上の諸問題A・B　釘貫教授・齋藤教授
日本語学概論A・B　宮地准教授
文法史研究　宮地准教授
従属節の文法的性質　矢島正浩講師(非)
日本語文法研究の諸問題A・B　江口正講師(非)
日本精神史―魔王と生身　宮地准教授
宗教テクスト学講義　阿部教授
儀礼とテクスト・フィールドワーク演習―善徳寺虫干法会　阿部教授
儀礼とテクスト・フィールドワーク演習―花祭・大須真福寺の年中行事　阿部教授
太子伝研究―太子絵伝絵解き実習　阿部教授
太子伝研究―太子伝を読む　阿部教授
日本思想史演習　阿部教授
宗教テクスト学実習―大須文庫調査研究　阿部教授
宗論という宗教テクスト　阿部教授
日本言語文化入門(1)(2)　齋藤教授
日本言語文化の諸問題(1)(2)　齋藤教授
翻訳表現の研究(1)(2)　齋藤教授
王朝物語の諸問題　大井田准教授
王朝日記の諸問題　大井田准教授
王朝文学演習(1)(2)　大井田准教授

占領期文学研究 1950－1951　坪井教授
近代日本の思想　坪井教授
比較文学と文化研究(1)(2)　日比准教授
近代と近代批判の諸相(2)　坪井教授他
日本文化の基層(1)(2)　齋藤教授・日比准教授
日本語論文作成法A・B　大井田准教授
視覚文化理論研究　宮地准教授
テクスト布置解釈学原論　齋藤教授他
テクスト布置解釈学各論Ⅲ　坪井教授他
テクスト布置解釈学各論Ⅳ　釘貫教授他
テクスト布置解釈学各論Ⅴ　釘貫教授他
中世人の連想の世界(1)(2)　塩村教授
日本語学説史の研究　釘貫教授
日本語学概論A・B　宮地准教授
文法史研究　矢島正浩講師(非)
従属節の文法的性質　江口正講師(非)
万葉集を読む　釘貫教授
本居宣長『玉あられ』研究　釘貫教授
『天草版平家物語』研究A・B　宮地准教授
日本語文法研究の諸問題A・B　宮地准教授
日本語研究上の諸問題A・B　釘貫教授・齋藤教授
日本精神史―魔王と生身　宮地准教授
儀礼とテクスト・フィールドワーク演習―「善徳寺虫干法会」を聴聞する　阿部教授
儀礼とテクスト・フィールドワーク演習―「花祭」に参加する　阿部教授
太子伝を解く―絵解き実習　阿部教授
太子伝を読む―『正法輪蔵』研究　阿部教授
日本言語文化入門Ⅰ・Ⅱ　齋藤教授
王朝物語の諸問題　大井田准教授
王朝日記の諸問題　大井田准教授
日本近代文学で考える〈公共〉〈親密〉〈私〉　塩村教授

〈学部〉
日本文学研究の諸問題(1)(2)　高橋教授
日本書誌学研究(1)(2)　塩村教授
西鶴研究(1)(2)　塩村教授
明治期の文学と出版文化　甘露純規講師(非)
和歌・歴史・源氏物語　久冨木原玲講師(非)
三十六歌仙を読む(1)(2)　高橋教授
徒然草研究(1)(2)　塩村教授

日比准教授
占領期文学研究 1950－1951　坪井教授
近現代日本文学の分析法・入門　日比准教授

○平成二十三年度春季大会
日時　七月九日（土）午後二時～五時
場所　名古屋大学文学部二三七講義室
シンポジウム「風呂と近代―統御と侵犯の空間を読む」
パネリスト
一柳廣孝（横浜国立大学教授）
「湯煙の向こうに怪異は潜む―島尾敏雄「冬の宿り」から」
光石亜由美（奈良大学准教授）
「大江健三郎「セヴンティーン」と〈トルコ風呂〉」
福田眞人（名古屋大学教授）
「鴎外の手拭、北里の大風呂」
司会・コーディネーター　日比嘉高
総　会
懇親会　午後六時～八時　グランピアット山手通店

○平成二十二年度卒業論文
宇野浩二『蔵の中』論　安藤尚子
『源氏物語』における「心の闇」　池山朋花
『徒然草』にみられる『源氏物語』からの影響　木村阿矢加
〈中将姫説話〉にみる女人往生　坂井田明美
兼好の女性論について　清水知美
『太平百物語』論　高野尚子
源氏物語と斎王　高橋美紗子
女性入水譚考
―室町時代物語を中心に―　濱口真衣
樋口一葉『にごりえ』論　見須郁美
国会会議録を用いた外来語の分析
―「メリット」の意味・用法の拡大―　小田耕輔
願望表現「まくほし」・「がほし」の使い分けと「まほし」への移行　鈴木智絵
文末表現の男女差
―自然発話とフィクションの比較に見る　伊藤史緒
古代日本語名詞「よそ」「ほか」の意味用法　加藤明佳
「欲りす（ホリス）」から「欲す（ホッス）」へ
―和語サ変動詞の消長―　清水美紀
現代における「降りつづく」と
「降りつづける」の使用実態について　鈴木智也
接頭辞「ま（真）」の語形成に見る歴史的変化・
音韻形態　辻田英里

古代日本語における助動詞「べし」
—否定表現との関わりから—　福江美穂
万葉集における動詞連接後項「行く」の文法化に関する一考察　藤嶋裕紀
通時的にみた日本語動詞サ行変格活用の揺れについて　藤根みはる
現代日本語における接尾辞「ーチック」の使用実態　松本朋子
英単語中の/ei/音を外来語としてカタカナで表記する際の諸形式　三輪　晃
動詞「蹴る」の活用の変遷
—ラ行五段化と命令形の使用状況—　渡辺沙央里

○平成二十二年度修士論文
芭蕉俳文に於ける中国説話の影響の研究　蒙　娟
『俳諧類船集』と古俳諧の研究　河村瑛子
『今とりかへばや』研究　出口游基
敬語動詞に関する歴史的研究
—「遣はす」と「召す」を中心に—　石田映子
日本語の授受表現「(テ)ヤル」「(テ)アゲル」の諸用法　許　嘉航
現代日本語における引用を表す「と」の諸用法　徐　代豪
感情動詞における「サセラレル」形式の用法分析　陳　彬彬
vn漢語動詞の構文的特徴
—項の重複現象を中心に—　任　晗
日本語の感情動詞におけるヲ／ニ格選択に見る諸特徴　松野美海

○平成二十二年四月から平成二十三年三月、次の方々が博士学位を取得された。
〈課程博士〉
戦後初期国語科教科書の研究
—日韓中学校教科書における「連続性」の問題—　朴　貞蘭
日本近代における音声研究の発達と西洋の影響に関する考察　内田智子
『枕草子』とその周辺—サロンと後宮—　東　望歩
キリシタン・ローマ字文献の書記論的研究　千葉軒士
日本語の述語接辞qualifier　RONI
中・近世における語彙項目の感動詞化
—呼びかけ感動詞体系変遷の主要因として—　深津周太
日本語の文末表現にみる形式・意味・場面条件の相関

―人称が表示する文法構造―　加藤　淳
〈夢のやう〉の表現史から国語教育へ　加藤直志

○本年四月一日現在、日本文学研究室には、学部二年生七名、三年生十名、四年生九名、大学院前期課程四名、後期課程十三名の計四十三名（内、留学生八名）、日本語学研究室には、学部二年生十二名、三年生八名、四年生六名、大学院前期課程六名、後期課程十名、研究生・聴講生一名の計四十三名（内、留学生九名）が在籍している。

○平成二十三年度秋季研究発表会
日　時　十二月十日（土）午後二時～五時
場　所　名古屋大学文学部二三七講義室
内　容　「『うつほ物語』における表現の方法―好忠と順の歌との共通語彙を通して―」　内藤英子
「上代におけるラムの意味的機能について」　小出祥子
「歴史叙述における仮名の特質―定家自筆本『安元御賀記』を初発として―」　猪瀬千尋
懇親会　午後六時～　グランピアット山手通店

○本誌への投稿をお待ちしています。投稿規定は次の通りです。
＊投稿資格　本学会員
＊枚数　出来上がり原稿にて一四頁（縦書きは二十五字×二十二行×二段組／頁、横書きは三十七字×三十行／頁）以内を厳守。但、審査の過程で加筆の必要が生じ、結果として掲載時に一四頁を超過する場合もある。
＊原則としてメール添付による入稿とする。ただし、メール添付に不都合がある場合、フロッピーディスク等の電子媒体による入稿も可とする。手書き原稿の場合は事務局にご相談下さい。
＊原稿の採否は編集委員の採否を経て運営委員会が決定する。
＊原稿の採否の問い合わせには応じない。
＊投稿原稿は返却しない。
＊投稿の際、原本一部、コピー二部、計三部それぞれに要旨（二百字程度）を添えて提出のこと。
（入稿規定）
一、データはワード文書もしくは一太郎文書（テキストファイル形式も可）を原則とする。

二、論文と要旨は別ファイルとすること。
三、入稿に際しては、メール添付の論文ファイル・要旨ファイルのほか、必ずプリントアウトした原稿を三部提出すること。特殊文字・罫線等や割付は、この原稿にしたがって版を組む。
四、採用の場合、校正編集補助費として、原稿一本につき五千円徴収いたします。
五、審査はプリントアウトした完成原稿によって行う。

付記、次号（百五号）の締切は二〇一二年五月一〇日です。

メール送付先　machiko@lit.nagoya-u.ac.jp

☆次号（百五号）は、高橋亨先生の御退職記念号となります。ふるってご投稿くださいますようお願いいたします。

○編集委員（五十音順）
阿部泰郎・大井田晴彦・釘貫　亨・齋藤文俊・榊原千鶴・塩村　耕・高橋　亨・坪井秀人・日比嘉高・宮地朝子

○本号の刊行に際しての実務担当委員は次の方々です。
櫻井　豪・高橋芽衣子・民家春菜・松野美海・眞野道子・横山知恵・川辺瑞絵